

芝木好子
京の小袖



講談社

きょうこそで
京の小袖

昭和六十年四月二十日 第一刷発行
昭和六十年七月十日 第三刷発行

著者——しばきよしこ芝木好子

© Yoshiko Shibaki 1985, Printed in Japan



発行者——野間惟道

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号二三 電話東京〇三—九四—二三（大代表）

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——藤沢製本株式会社

定価——一四〇〇円

著丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替いたします。

目次

風花

貝母

山陰の人

籠の中

妹

異国の旅

高い場所

京の小袖

あとがき

5

37

67

87

107

127

151

171

203

装幀 佐多芳郎

芝木好子作品集

風花

夕暮の渋谷駅へ入ろうとする国電の窓から加奈子は下界の街を見下していた。駅前の道玄坂へ通じる四つ角はゴー・ストップの青い信号とみえて、^{おびただ}夥しい人間が歩き出し、広い街角は動く群集で埋められていた。人はいそがしく師走の町を行く、と眺めながら、それらの人々は実は意味もなく流れているに過ぎない気がした。電車は駅のホームへ滑りこんだ。

彼女は電車を降りて、自分もまた同じ群集にまぎれるために駅前の広場へと出ていった。都会の夕闇のくる大通りは川に似て沈み勝ちで、人は流れに漂う芥のように、濺んでゆく塵のように吞まれてゆく。あてどない人間が都会には多すぎる。家もなく家族もない彼女の同類がぼんやり歩いてゆく。彼女はコンクリートや木造の建物の中の箱のように並んだ部屋を家とは考えられない。男と女が二人で暮すからといって、家族とも思っていない。まだ安んじるものを持たないせいだろうか。

道玄坂へと彼女は向ってゆき、とある建物の二階の小さなレストランへ上っていった。そこは月に一度堀江信高と食事をする処であった。まだ時間に早いのか窓際の席があいている。彼女は窓から舗道の人の流れを見ていれば、彼の来方がおそくても気にならない。人は次々と現れては儚い影^{はかな}になって消えてゆく。今日勤め先の島デザイン研究室を出てくる時、島に呼びとめられた。今日は月給日で、残業の多いデザイン研究室に誰もいなかった。といっても小さなビルディングの一室きりのオフィスで、島を入れて五人しかいない。彼女は女一人のお茶汲みだが、勤めて一年目から夜間のデザイン学校へ二年間通ったので、いくらかの仕事は手伝わせてもらっている。

「クリスマスに家で集まるだろ。その時相客がくる。瀬木が連れてくるから紹介するよ」島は長い髪をゆすりながら言った。瀬木は彼の友人でデザイン研究室へよく来る。加奈子は微笑して島を仰いだ。クリスマスには例年オフィスの連中が招かれて島の妻の美子のもてなしにあずかるが、彼女は料理のうまい、てきぱきした明るいひとだった。加奈子はいつも社会の仕組からはみ出しているような自分にも、たまには世間並みの声がかかるのかと思った。

レストランのまわりの席に客が入りはじめたが、信高はまだ来ない。彼の姿が見えないと、もう来ないかもしれないと思う。彼の現れるのはいつも遅く、待つ間に、もう来な

い、と感じる感じ方は変らない。彼とは同じ私鉄の駅の歩いてゆける距離に互いのアパートがあったが、ある日はアパートから忽然と消えてしまうかもしれないと思う。半人前のシナリオ作家だが、探しようはあるかもしれない。しかし探すのだけはよそうと思う。そう思いながらあのことは分らない。絶えず消えてしまう予感の中にいるだけである。小さな箱にすぎないアパートに暮らして、どちらの箱に移っても大したことはないが、彼は誘わないし、彼女も口にしたことはない。彼の出身地は何処で、肉親はどうしているのか、言葉の端し端しでいくらか聞き知ってはいるが、強いて喋ろうとしない男からくどく引出そうとは思わない。彼女は自分のことを語ろうにも、自慢することは何一つないのだった。互いに都会の中の浮き草か、流れに漂う木の葉か、そんなもので、一人前の社会人と言えたものではない。親が早く死に、身よりのない寂しさと同じくらい、家がない、還るところがない虚しさを感じる。自分の根源につながる生れた大地と家を、彼女は夢に見ることがある。

信高に話したことがあったが、彼女の父は下っぱ役人で、一生転々と任地をまわった。彼女は小学校を四度代ったが、生れた千葉よりも、群馬の古い街道近い町の外れの借家を忘れなかった。それは一軒家でいくらかの庭があり、庭の隅に大きな桐の木があった。家は今までのどの家よりも広くて、陽溜りの縁側から桐の木に紫の花がつくの初めて見

た。座敷には大きな掘り炬燵があつて、父母と弟とで冬の食卓を囲んだのを加奈子は忘れることはない。家族の団欒を味わたのはそこまでだからであつた。その家を去つて間もなく母が乳癌で死んだ。それからは風の吹き荒れる借家しか思い出さない。高校を出る年に父が亡くなり、弟は翌年高校を出ると、北海道の大学へ入った。彼女は東京の建築会社へ就職して上京したが、三年で罷めて、今の島デザイン研究室に入った。新聞で見て面接に出向いたが、月給をきちんと払う所かどうか、氣になった。月給は小遣にする、と答えた面接の女子大生もいた、とあとで聞いた。

島デザイン研究室は初め三人であつたが、ある乳業会社の扱う容器のデザインがおもで、仕事は少しずつ安定して、今は五人に増えた。小さな組織で仕事をするために多忙で、残業が多かつた。過重な仕事も生きるための手段で仕方がなかつた。加奈子が夜間のデザイン学校へ通つたのは、いくらかでも彼らの手伝いがしたいからであつた。

レストランの階段から信高が姿を現した。痩せているので背丈が特別高く見える。頬に肉がなく、年齢より老けた感じがするが、卑しさはない。神経質な気難しさもあるが、ふつと気分よく表情を柔らげる瞬間の男に、彼女は心を誘われるのだった。彼が階段を上つて寄つてくると、ああ彼は来た、今日も会えた、と思うが、口にはしない。吹き溜りに合わさつた木の葉と木の葉のように、一つ卓に顔を見合すのだった。

「なんで顔ばかり見るんだ」

と彼は女へ向けて突き放すような口の利き方をする。

「なんでもないわ」

彼女は窓の下の舗道へ目をやる。街はすっかり灯の明るい年の瀬の表情になっていた。

「土曜日のせいか人がずいぶん通るわ。原宿はもっとすごいでしょうね。肩がぶつかるほどよね。他人とぶつかるのは嫌なものね」

「なに思い出してるの」

彼は若者の蛸集する街を目に浮べたが、すぐメニューを取上げた。ふだんろくなものを摂らないくせに、彼は料理を慎重に選ぶのだった。加奈子は彼の選ぶものと同じでいい。彼が目の前にいるだけでいい。吹き溜りのひとりでなくて助かる。

デザイン学校に通って卒業制作にかかる頃だったが、彼女は夜光の蝶を描くことに決めて、デザインの参考実物の蝶を手に入れようと考えた。人に聞くと、原宿の表参道を一つ入った竹下通りに蝶を商う店がある、と教えられた。ある日曜日、彼女は尋ねていった。表参道よりも人通りの多い竹下通りは、若者のメッカとみえて両側の商店はファッションの服やアクセサリを並べて賑わっていた。腕を組んだ若者と少女がソフトクリームを舐めながら歩いていた。蝶を商う店は途中の横町に入ったビルディングの二階にあっ

て、扉に「トロピカーナ」と出ていた。店は狭いマンションの中に蝶のロッカーを並べている。靴を脱いだ客は若い主人に挨拶してから、ロッカーのケースに展翅して分類した蝶を見てゆくのであった。ありふれた蝶は同種が二十も行儀よく並んでいて、和服の柄のよう美しい。大きな蝶や、稀蝶はケースに一個か、三個か、いろいろである。生れて初めて蝶の種類を見た加奈子は、目が眩んでいた。先客がひとりいて、主人と話していた。主人は毎年夏になると蝶を捕りに南方へゆくが、今年はセレベス島へゆくつもりだと語っていた。彼の掛けている狭い仕事場の机の上には展翅しかけた揚羽蝶が翅をひろげてピンで止められていた。

「商売になるほど南方で蝶が捕れるか」

と店の主人より少し年長の客は聞いた。

「運がよければオオオナガタイマイを捕ったこともあるけど、こんな素晴らしいのは借しくて売れない。前翅で飛んで、後翅の長くて白い尾を引いてゆくのが実に優美だね」

主人は蝶狂いの本性を覗かせて、目を細めた。

「出かける時、蝶マニアに頼まれるのか」

「金を出してくれるスポンサーもあるけど、三十万貰っても手放したくない蝶もある」

話しながら主人は加奈子のためによく光るオオルリアゲハを選んだ。すると客は彼女の

手許の白い蝶へ目をやって、

「クモマツマキチョウ。飛んでいるところが雪の花みたいな奴」

と呟いた。白の上翅に朱色をつけた小さな蝶は繊細であった。彼女は、これも頂きま
す、と言った。蝶は一頭、二頭と数えて、二、三百円のものもあれば、二、三万円のも、
何十万円のものもあった。彼女は小さなケースに二頭の蝶をもらって外へ出た。通りの角
に喫茶店がある。入って休みながら、手に入れた蝶をひらいてみると、小さな慰めを感じ
た。蝶は息を止めたあとも、翅をひらいて静止した姿が美しかった。生き返ってもう一度
天空へ飛揚するよろこびを、人間は蝶に仮託する。彼女はデザインの構図が見えてきた。
狭い喫茶店に男が入ってきて、ただ一つ空いている彼女の隣の椅子に掛けた。「トロピ
カーナ」で会った男であった。人はそれぞれに気難しさがあるが、偶然や運命には従順な
ところがある。加奈子は堀江信高と知りあった。

喫茶店の隣の卓に集った男女の高校生が数人で喋っている。女教師の噂とみえて、
「二十六のオパンのくせによお」「まださあ、色気があんのよねえ」と賑々しく喋り散ら
している。加奈子はぎくりとして顔をそむけた。その伝でゆくと、彼女も色褪せた人生の
終りに差しかかる年齢であった。男の顔にもうっすらと苦い笑いが浮んでいた。高校生の
騒々しい声に追い立てられて、二人は喫茶店を出た。原宿の通りはまだ男とも女とも呼べ

ない若者と少女が我がものの顔に歩いていて、加奈子と男とは場違いの感じを免れなかった。そのことが親近感を誘った。原宿の駅で彼らは同じ東横線の沿線に住んでいることを知った。

「蝶、好きですか」と彼女は聞いた。

「中学時代によく網を振り廻しましたね」

「コレクションしていらっしゃる」

「田舎の家に少しはあるが、アパートには十箱くらい。それもしじみ蝶ばかり」

「しじみ蝶って、なんですか」

「ごく小さい、くだらない蝶。くそ蝶とも言う」

「小さい蝶も、三十頭も四十頭も並ぶと綺麗でしょう」

「死んだ妹は、クモマツマキチョウが好きでしたね。愛らしいですからね」

彼は自分の言葉に気付いて、口を噤んだ。彼の妹は若くて死んだのだろう、と加奈子は思った。きれいな蝶を二頭買い求めたが、次はしじみ蝶がほしい、と彼女は呟いた。

「しじみ蝶なら上げよう。ぼくはもう要らない。場所塞いで困っている」

彼はそう言った。

川瀬の瀬に木の葉と木の葉がたゆたっているように、偶然に流れついた者たちかもしれ